

胆振管内9市町をネットワーク
第98号

令和7年度 研究所機関誌

教育いばり

特集
1

私・我が校の、学年・学級経営

特集
2

一人一人の子供を主語にする授業づくり

- ◆ 不登校・長欠児童生徒の予防・発見・対応
- ◆ 特別支援教育だより
- ◆ 記憶に残る・心に残る、あの子ども



Designed by Genki Fukuyama on Gemini

胆振教育研究所

卷頭言	「授業の基盤は、学年・学級経営から」	
	胆振教育研究所 所長 佐藤 淳	……1
教育への展望	「内発のための外発」	
	壮瞥町教育委員会 前教育長 谷坂常年	……2

特集1 [私・我が校の、学年・学級経営]

①学年経営へのシフトチェンジ～授業・生徒指導への組織的な改革	
伊達市立伊達小学校 教諭 藤井涼介	……3
②子どもを真ん中に置いた幼小連携を活かした学年経営	
安平町立早来学園 教諭 江口芳美	
教諭 渡邊小春	……5
③学年・学級経営で気を付けていること	
壮瞥町立壮瞥小学校 教諭 立石禎子	……7

●不登校・長欠児童生徒の予防・発見・対応

「当たり前のことを行つても通りに！」安心できる学校づくり	
洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校 教諭 板垣武宏	……9

●特別支援教育だより

特別支援だより「Flower」を通して伝えたいこと	
むかわ町立穂別小学校 教諭 藤原学	……11

特集2 [一人一人の子供を主語にする授業づくり]

①一人一人の子供を主語にする授業づくり	
登別市立鶯別小学校 教諭 柴田航輔	……13
②子どもを主語にした理科学習の実践	
伊達市立伊達西小学校 教諭 鈴木大地	……15
③児童が主体的に学習できる授業を目指して	
厚真町立厚真中央小学校 教諭 高田美緒	
教諭 佐藤寛太	……17
④一人一人の子供を主語にする授業づくり	
豊浦町立豊浦小学校 教諭 長田真希子	……19

●記憶に残る・心に残る、あの子ども

「その子のためのオーダーメイド教育」	
白老町立白老小学校 教諭 渡辺彰子	……21

巻頭言



「授業の基盤は、学年・学級経営から」

胆振教育研究所 所長 佐藤 淳

「一人一人の子供を主語にする学校づくり」。本研究所では、昨年度からこのテーマで理論研究を始め、研修講座や学校訪問の中で胆振の先生方のたくさんの実践に触れることができました。多くの授業実践を見聞きする中で感じたのは、学年・学級経営です。学年・学級経営がしっかりと確立されてこそ、一人一人の子供の学びや成長が保障されます。学級の中に心理的安全性が確保されていると、子供たちは互いを認め合い、挑戦しようとする意欲が生まれます。その基盤の上に、主体的で協働的な学びが展開されていくと考えます。今回の機関誌には、そのヒントとなる実践の成果が、たくさん表れています。

伊達小の藤井先生、早来学園の江口先生、渡邊先生、壮瞥小の立石先生は、学年・学級経営について、それぞれの学校の取組を紹介してくれました。教科担任制や学年ごとの研修テーマの設定、幼小の懸け橋期カリキュラムの設定や合同研修、特別支援学級の担任との連携など、教員も協働的に学ぶことが大切であることがわかります。

洞爺湖温泉小の板垣先生は、不登校・長欠防止の取組で、複式学級においても複数の教員が指導に関わる体制づくりや朝の時間に全校で合唱する活動による実践を紹介してくれました。

特別支援教育の取組では、穂別小の藤原先生が、保護者と教員に向けて、年に複数回特別支援だよりを発行し、特別支援教育についての保護者への啓蒙と教員への理解の向上に役立てていることを紹介してくれました。保護者だけでなく教員用も作成しているのは、若い先生方にとって貴重な資料になる素晴らしい実践です。

鷺別小の柴田先生、伊達西小の鈴木先生、厚真中央小の高田先生、佐藤先生、豊浦小の長田先生は、「一人一人の子供を主語にする授業づくり」を充実させる授業の実践を紹介してくれました。Googleフォームを活用した振り返りの蓄積、理科の学習におけるICTを活用した問い合わせや自由形式での成果発表の取組、国語の自由進度学習や教科の特性に合わせたICTのソフトを使い分け、子供の興味・関心を的確にとらえた学習課題を決めた総合的な学習の時間の実践などに取り組んでいます。

白老小の渡辺先生には、産休明けに初めて特別支援学級を受け持った時の経験を書いていただきました。子供に合わせた指導支援の必要性を感じ、特別支援教育について自ら学んだこと、その学びを生かした指導が、その児童の成長につながったことが、渡辺先生の財産になっていることが伝わってきました。

今回の機関誌は、小学校の実践ばかりになってしましましたが、より多くの胆振の学校の実践を紹介する冊子です。ぜひそれぞれの先生の実践を読んで参考にし、もう一工夫できるところは改善して活用する等、先生方のお役に立ててもらえると、執筆してくださった先生方も報われるを考えます。後期もたくさんの先生方の実践を紹介してまいりますので、ぜひ胆振の先生方の資質・能力の向上に役立ててもらえれば幸いです。

教育への展望



「内発のための外発」

壮瞥町教育委員会 前教育長 谷坂常年

「教育いぶり 第98号」の発刊にご尽力いただきました、胆振教育研究所長をはじめ、多くの関係者の皆様に、感謝と敬意を申し上げます。

さて、文部科学省で学習指導要領の改訂等も担当されました合田哲雄高等教育局長のご講話など、インターネット等で一般公開されている内容を拝聴していました。その中で、印象に残っているものについて、一つご紹介させていただきます。

『教育の分野ほど、議論の土俵が割れている領域はないと思っています。中教審の会長で京都府の堀川高校の校長でいらした荒瀬克己先生は、「子どもたちの学びも教育行政も内発のための外発だ」とよくおっしゃいます。学びや教育は、「自分たちが担っていくんだ」という思いがないまま、トップダウンで動かそうとしても空回りするだけ。一方で「内発神話」と申しますか、「子どもたちがその気にならなければどうしようもないんだから」といってほったらかすと低迷します。私はこれらどちらも間違えていると思っています。重要なことは、「内発のための外発」をどう仕込んでいくのかということです。』(教育の本質を端的に表現しているように思います。)

さて、壮瞥町では、国際交流基金の積み立てにより、30年間、全額町費で、中学校2年生（現在は隔年で1、2年生）の希望者全員にフィンランド国派遣事業を実施するなど、地域全体で子どもたちを育てることを大切にしてきました。また、本年7月に、壮瞥中学校の新校舎が壮瞥小学校に隣接し、渡り廊下で結ばれて完成しました。校舎の各教室、廊下など全てに冷暖房（体育館は暖房）が完備され、2階のオープンスペースは、校舎のほぼ中央に位置し、図書スペース（小中の学年・クラスの枠を超えた交流の場として開放的なスペース）、ラウンジ（集会をおこなえる広さ）、ワークスペース（生徒や先生が談話や学習するスペース）となっており、1万冊以上の図書が収納され、小学生、中学生が自由に本を読んだり、タブレットで学習したり、先生と生徒がコミュニケーションできるスペースとなっています。子どもたちの9年間を見通した「壮瞥型小中一貫教育」をさらに充実したことと、「内発のための外発を全ての教育活動の中に仕込んでいくこと」を心から願っております。

結びに、教育に関わる先人の皆様が蓄積された「教育の力」をさらに発展させて、全ての方々と力を合わせて、子どもたちが多様な人々と激動の社会的変化を主体的に乗り越え、一人一人が自分のよさと可能性を認識するとともに、それぞれの未来を思い描く時に見せる「瞳の輝き」を守り、育していくことが我々の大きな使命の一つであると思っています。



学年経営へのシフトチェンジ ～授業・生徒指導への組織的な改革～

伊達市立伊達小学校 教諭 藤井涼介

1 はじめに～本校の課題と強み

- | | |
|----|--|
| 課題 | … 子ども主体の授業づくり
不登校傾向児童の増加
学年を軸にした経営&授業改革力 |
| 強み | … 豊富な教職員人材
ICTの活用基盤
ベテランの知見と若手のスピード感 |

本校では今年度、これらを背景として捉え、「学び続ける子の育成」を最上位目標に掲げ、その実現に向けた1つの手段として、「学級経営⇒学年経営へのシフトチェンジ」に着手しているところです。本稿では2節において「学年経営の具体」、3節において「学年経営により見られた効果」を紹介いたします。

2 学年経営の具体

(1) 教員の専門性を生かした授業交換・教科担任システム

本校は、各学年2・3クラスの規模となっています。そこで、各担任の専門性を生かし、年度始めの学年打ち合わせによって決めた教科担当をベースに、「教科担任制」に取り組んでいます。例えば、2学級の6学年では、「国語・体育・家庭科」と「算数・社会・図工」に担当を分けています。3学級の4学年では、「社会・総合」「音楽・図工」「理科」と3つに分けています。「国語」「算数」を単元によって教科担任制に組み込んだり、同学年の特別支援学級担任も専科指導を行ったりしています。

(2) 多面的な児童理解、相談体制の充実

生徒指導に関しても学年経営がベースにあります。生徒指導事案、児童の引き継ぎ事項について、スプレッドシート等に共有して蓄積させていくことで、学年・全校的な共通理解をもとに児童対応を行っています。また、担任だけではなく、どの先生にも相談できるような体制をとり、早期対応に努めています。

令和7年度 伊達市立伊達小学校 学校経営方針

学び続ける子の育成

- 「確かな学力」(知識・技能)
「コミュニケーション力」(思考・判断・表現)
「自己調整力」(学びに向かう力・人間性)

研修テーマ

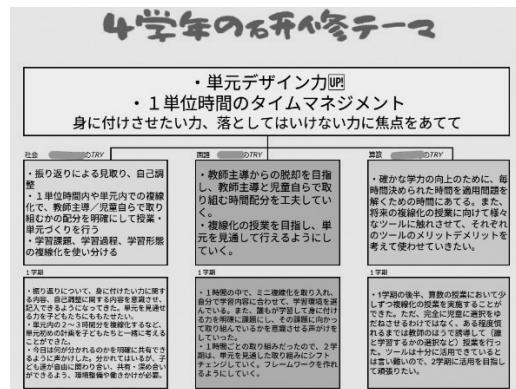
学び続ける子の育成と確かな学力の定着・向上を

図るための授業改革

- 今年度の
重点
- | | |
|-------------|------------|
| ◇質問・能力の向上 | ◇地域との連携・協働 |
| ◇特別支援教育の充実 | ◇教員の人材育成 |
| ◇生活・学習習慣の確立 | ◇働き方改革の推進 |

(3) 研修テーマを学年共通にし、授業改革の視点も同じ目線で

校内研修テーマに関しても、学年で共通のテーマを掲げて授業改革に同じ目線で取り組んでいます。教科毎の専門性はあれども、個別最適な学びや協働的な学びの実現、「学び続ける子の育成」に向けて担任それぞれがTRY（挑戦すること）を掲げ、学年研修にその進捗状況の交流を位置付けています。



3 学年経営により見られた効果

2節にて挙げた3つの具体的実践に関して、そのメリットを挙げていきます。

(1)の実践では、同じ授業を各クラスで複数回行うことで授業の質(指導力)が向上し、授業準備の効率化(働き方改革)を図ることができます。評価についても教科担当が行っており、学年全体で児童を見取っていくことにつながっています。

(2)の取組から、風通しのよい学年経営が期待できます。本校で児童を対象に行なった学校評価(4月下旬実施)においても、「どの先生の授業でも安心して取り組むことができる」という質問に対し、96.4%が肯定的評価をもっていることから、色々な先生との関わり合いが当たり前になっていることがうかがえます。これは、生徒指導における早期発見・早期対処・早期解消のベースとなります。また、経験年数等の違いによって、対処が難しいケースについても、学年全体で対応にあたることが可能となります。

(3)によって、学力向上、個別最適・協働的な学びの実現等に向けて、学年団が同じ視点をもって授業改革を推進できるようになりました。年度当初に、学年毎に立てたテーマをひとまとめにすると、“「授業の複線化」と「学びの自己調整」を「確かな学力」につなげていくには”という部分が共通となっています。「学び続ける子の育成」に向けて、本校全ての教員が同じ視点で授業改革を進めています。

4 おわりに～教師も学び続けなければなりません

「学び続ける子」の育成のためには、我々教師も学び続けなければなりません。学級にカラーがあるように、学年にもカラーがあります。本校で培われた学年毎の実践をブロックへ、全校へと拡充すること。地域や他の学校へ向け、成果・課題を含めて発信し続け、改善を図ること。この2点を今後の課題として、本校に通う全ての児童が安心して学び続けられるよう、さらなる取組を続けてまいります。



子どもを真ん中に置いた 幼小連携を活かした学年経営

安平町立早来学園 教諭
教諭

江口芳美春
渡邊小春

1 はじめに

幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた資質・能力は、生涯にわたり重要なものであり、前期課程（小学校）以降の生活や学習においての基盤となる。それを前期課程以降の教育で更に伸ばしていくためには、子どもたちの将来を見据え、0歳から18歳までの学びの連続性に配慮しながら、架け橋期のカリキュラム等により、教育内容や教育方法を工夫することが重要である。

そこで、本校第1学年では架け橋推進員（はやきた子ども園教員）や放小連携推進員（はやきた子ども園学童担当）と連携し、情報交換や合同研修、交流活動などを通して、教職員間の連携を深め、子どもたちの学びの連続性を確保するとともに、「小1 プロブレム」を防ぐことを目指す。

2 実践例

(1) “学びの連続性”“互恵”（交流活動）

園児は交流活動に取り組むことにより義務教育学校という施設、本校児童生徒及び教職員を身近に感じられるようになり、成長を具体的にイメージすることをねらいとする。また児童は生活科等の学習の中で、園児とのかかわりを通して自分の成長を実感したり、課題を解決したりする力を育てることをねらいとする。両者のねらいの達成（互恵）に向けて、交流活動を積極的かつ計画的に取り入れている。

(2) 幼小の協働による架け橋期カリキュラムの整合性

前期課程においては、幼児期に幼児自らが遊びに向かう自発性を大切にした教育が行われていることを踏まえ、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かい、授業や学習の楽しさと充実感を感じながら基礎的な学力を身に付けていくようにすること、特に入学当初は幼児教育との指導方法の連続性・一貫性を確保することをねらいとして取り組んでいる。以下は、生活科における実践例である。



【子ども園での交流（生活科）】

【生活科『学校探検』】

教師が学校のルールを最初から教えるのではなく、「きゅうしょくはどこでたべるの？」「わすれものをしたらどうする？」「すいとうはどこにおくの？」など、“子どもの疑問を子どもたち自身で探る”活動を大切にする。そして、それらの活動を通して、子どもたちは“自分たちの生活を自分たちで自得してつくりあげる”ことを目標に取り組んだ。

(3) 合同研修／授業公開の相互参加（情報共有）

はやきた子ども園、早来学園ともに“子どもの姿を真ん中”に置いた研修（合同研修／授業公開交流等）を進め、幼児理解や児童理解を深め、子どもに寄り添った学びを展開している。研修には、後期課程教員も参加し、幼小中連携の学びの連続性を確保していくことを目指している。



【合同研修（はやきた子ども園）】

3 おわりに

幼小連携が重要視される背景には、「小1 プロブレム」と呼ばれる、小学校入学当初に見られる子どもたちの学習意欲の低下や、生活リズムの乱れ、集団生活への不適応などの課題があると言われる。しかし、架け橋推進員^{*1}や放小連携推進員^{*2}と連携することで、これらの課題を未然に防ぎ、子どもたちが意欲的に学習に取り組む姿が見られる。

また、“授業だけが学習ではないこと”や“教室環境（空間）に学びを埋め込むこと”など、幼小架け橋推進員と共にしたことで、子どもの学びについて知る機会となった。子どもたちの『知りたい／やりたい』が学びにつながり、『選択と試行』が主体的な学びにつながることを意識して取り組んでいきたい。

しかし、子ども園と生活スタイルが異なり、新しい環境の中、子ども同士の学び合いをどう成立させるかという大きな課題があるのも事実である。

* 1 架け橋推進員：幼児教育から小学校教育へのスムーズな接続・移行を支援する
勤務体制…4月～9月早来学園（第1学年）10月～3月はやきた子ども園（年長組）

* 2 放小連携推進員：子ども園と小学校の連携を円滑に進める
勤務体制…4月～6月早来学園（第1学年）



学年・学級経営で 気を付けていること

壮瞥町立壮瞥小学校 教諭 立石禎子

1 はじめに

家庭の経済状況と自分の学力を考えて進学先を決め、そこで教員になるという選択をして30年近くが過ぎようとしている。1年だけ支援学級のフリーを経験した以外は、全て通常学級もしくは特別支援学級の学級担任として過ごしてきた。師と仰ぐ先輩や理想の教師像をもち、そこを目指してやっていくとよいという話をよく聞くが、それを見つけられないまま、年数を重ねてしまった。こんな私のような志の低い人間が、何とかここまでやってこられたのは、丈夫に育てくれた両親と、同じ職場でいろいろ教えてくれた先輩や同僚たち、今まで出会った子どもたちや保護者の皆様の支えがあったからである。

思い返してみると、これまで勤務した学校はほぼ、単学級の規模であった。単学級の学年で通常学級の担任をすると、学級担任と学年主任の役割を兼務しているような状態になる。そのような経験の中で自分なりに意識していることはいくつかあるので、少しまとめてみようと思う。

2 実践の具体

(1) とにかく相談をする

学年を切り盛りするにあたって、学習進度や教室環境、教材の選定や単元計画、生徒指導など細かいことから大きなことまで、自分で考えて進めていかなければならぬことが山ほどある。そんな中で、自分のみの判断で進めてよいのか迷うことがある。そのようなとき、特別支援学級の児童がいる場合は、特別支援学級の担任の先生に相談する。特に、行事の内容や進め方、交流で行う教科の学習などは、特別支援学級の児童の参加の仕方、配慮事項など共有すべきことが多い。学年と共に経営していく仲間として、同じ目線で学年に関わる



ことを考えていきたいと思っている。特別支援学級の児童がいないときは、職員室の中で声を上げ聞いてみると多い。そうすると、その学年を指導した経験の多い方や、その学校での経験が長い方のアドバイスをいただける。最終判断をするのは自分であるが、独りよがりにならないようにするためにも、他の方からの助言は大事にしていきたい。

(2) 早めに計画を立てる

運動会の計画はゴールデンウィークに、学習発表会の計画は夏季休業中に立てるよう心がけている。また、修学旅行や宿泊学習などの旅行的行事については、まとめの場面までのイメージをもって、年間指導計画とにらめっこしながら、どのような指導にどの時間をどれだけ使うのかまで、長期的に細かく考えておくようにしている。異学年と連携したり校外に出たりすることもある生活科や総合的な学習の時間、中学年の社会科などは、実施時期や内容を把握しておくことも大切だと感じている。これらを確実にやっておかないと、時数面での失敗が起きかねない。特に高学年は学習内容も難しくなり、余剰時数も比較的少いことがある。時数管理を確実に行うためにも、計画的に物事を進める視点が、学年経営をする上では必須であると考えている。

(3) 単元を見通して計画を立てる

(2)ともやや重複するが、授業を創っていく中で最も大事なのが、単元計画であると考えている。単元の見通しをもつことで、はじめて1時間ごとの授業計画を立てることができ。単元の進め方が決まれば、教材や教具などの準備を先に進めることができる。そうすることで心にゆとりができ、余裕をもって児童に接することができる。計画を早めに立てるために、休みの日の午前中を使っている。働き方としてよいのかと思うこともあるが、自主的で自律的な判断に基づく教材研究として、自己の資質能力を高め、児童の目指すべき資質能力の定着に向けて取り組んでいる。

3 おわりに

私のモットーは「人生常に前のめり、明日できることでも今日しよう。」である。一言でいうと「生き急いでいる」人間である。子どもの頃、夏休みの宿題はいつも、終業式を終えて家に帰ってきた瞬間に取り組み始め、その日のうちに全て終わらせていた。もって生まれた性分は、大人になっても変わらない。残りの年数もひたすらあくせくやっていく、ただそれだけである。



不登校・長欠児童生徒の予防・発見・対応】



「当たり前のことをいつも通りに！」 安心できる学校づくり

洞爺湖町立洞爺湖温泉小学校 教諭 板垣 武宏

1 はじめに

本校は噴火災害により校舎が被災した歴史がある。有珠山の2000年噴火では校舎が泥流に飲み込まれ児童の学び舎が失われた。度重なる被災から当時学校に携わる多くの方達が二度と噴火の被害に遭わない安全な場所に校舎を移転しようと建てられた現校舎も23年の月日が経った。当時120名を超えた児童数も時代の流れと共に減少し35名となっている。時代の流れと共に変わったのは児童数だけではなく温泉街から校舎が移転したことによる地域との繋がり方の変化や家庭環境等の変化もあり、本校でも体調不良等を理由として欠席が続く児童や配慮が必要な児童の割合が増えてきている。そこで、本校の日常的な取組について紹介したいと思う。

2 不登校・長欠児童生徒の予防・発見・対応

(1) 全教職員が全校児童の担任

① 朝の声掛け

本校は温泉街から離れた月浦地区に校舎があるため全校児童の9割がスクールバスを利用して登校している。朝スクールバスが到着すると学校長を先頭として職員が子どもたちを迎えていている。そのときに子どもたちの表情や様子を見取りながら一人一人に声掛けすることで、児童にとっては自分のことを見てもらえているという安心感が伝



わるとともに、「全教職員が全校児童の担任」の意識をもち児童の見取りを行い、情報共有を図っている。

② 複数体制による指導

1・2年生以外が複式学級であることから配慮が必要な児童の中には学習への不安を感じる子も少なくない。その不安が不登校や長欠の原因となる場合が見られる。

そんな不安な気持ちを少しでも解消できるように、「チーム担任制」を取り、低・中・高で複数での指導体制をとっている。複数の日で児童を見取り、その情報を共有することにより細やかな指導を行うことができる。また、欠席が続き授業進度が合わなくなってしまったときには、遅れている児童たちに配慮したクラスを一時的に設けて子どもたちの理解度に合わせた学習機会を確保できるように努めている。

(2) 安心と連携

① 歌声は心の窓

金曜日の朝の時間は、全校児童・職員が集まって合唱する「ハーモニータイム」という時間を設定している。人数こそ少ないがその歌声は音楽室や玄関ホールを包み込むほどとても伸びやかである。自信をもてたり周りを気にせずに声を出したりすることができるということは、それだけ不安や心配事から解放されている証拠でもある。安心でき



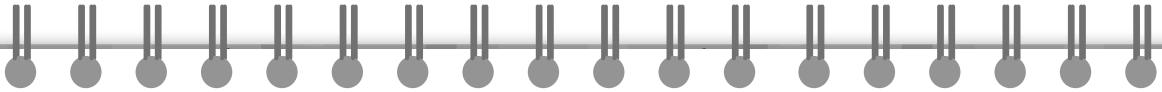
る環境を整えていくためにも全校での「ハーモニータイム」はとても役立っている。

② 保護者との連携

欠席連絡をメールソフトで受けているため保護者と欠席理由についての詳しい内容を把握できない場合がある。そこで配慮が必要な児童の家庭には担任やコーディネーターから電話を入れ、できるだけ欠席が長期化しないように家庭との連携を図るように努めている。また、明らかなきっかけとなる事柄がなくとも欠席が続いてしまい不登校傾向になる家庭に対しては、朝の10分間からの登校や中休みからの登校など、その児童にとって一番登校可能な状況を保護者と探し合いながら学校に来る時間の確保に努めている。

3 おわりに

不登校・長欠児童生徒の予防・発見・対応は、一朝一夕にはいかないものである。児童・保護者との関係づくりを密に行っていくこと。そして、その中で得た情報を職員間でしっかりと共有し共通理解の下で支援や指導を継続的に行っていくことが大切である。今後も職員間の連携を保ちつつ子どもたちへ安心できる居場所を提供していきたい。



特別支援教育だより

特別支援だより「Flower」を 通して伝えたいこと



むかわ町立穂別小学校 教諭 藤 原 学

1 はじめに

現行の特別支援教育が始まってもうすぐ20年になろうとしている。この間、社会での理解が進んできているが、まだまだ思われることも多い。例えば…

(1) 根強い拒否反応や偏見

特別支援学級に措置変更する場合、「保護者や祖父母が『世間体が悪い』という理由で反対している」との話を受けることは多い。「育て方が悪いから障害が出る」「身内に障害者がいると思われたくない」などの考え方方は根強く残っていると言えるだろう。

(2) 教員の知識のアップデート

自分自身もそうだったが、特別支援学級に関わることがなければ知識がアップデートされないままになってしまいがちである。特別支援の枠組みについて知る機会がないのが実情だろう。

(3) 市民権を得てきたために…

LD、ADHD、発達障害など、一般への知名度が高まってきた言葉は多い。しかしそれらを都合よく解釈し、SNS上などでは「私は発達障害だから」という言葉が失言や暴言の免罪符のように使われている場面があり、本当に悩んでいる人が言い出せない状況も見られる。

2 学校としてできることは？

以上のような実態がある中、本来受けられるはずの支援を適切に受けられない児童生徒が出てしまうことは避けたいとの思いから、微力ではあるものの保護者への啓蒙を図り、教員の理解を高めるために「特別支援だより Flower」を発行するに至っている。

Flower
むかわ町立穂別小学校 特別支援だより
2024. 3. 30 第2号

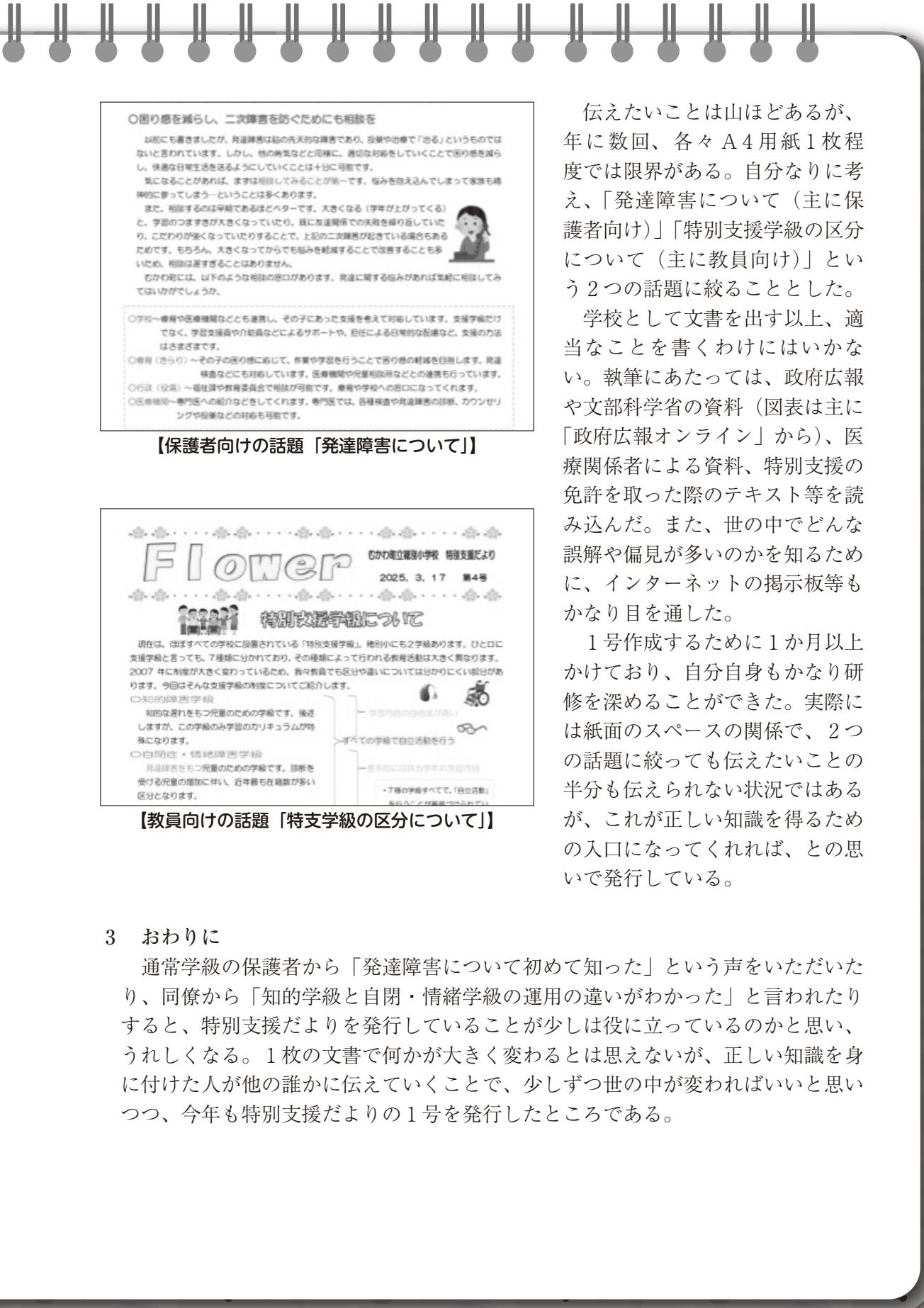
学習会が終わり、他の定性が聞こえてくる時期となりました。前段落くなってくるにつれて、休憩を取る子が増えています。元気で学習できるよう、席子が悪ければ机の下で休憩を取れるもの大切ですね。さて、今日は「発達障害」についてお伝えします。他の障害は、直く認知されるようになってから軽いものでも1世紀以上の時間が掛っていますが、発達障害は比較的新しい考え方となり、まだまだよく知られていないことは言えないのが現状です。それで長らく、「変わった子（人）」と呼ばれされたり、「ひつじ育育型に問題がある」とされてきたりして、「周囲の理解が得られない」ことがまだまだ多くあります。

発達障害の定義について

左の図に書かれている障害名、これら全てひとまとめにして「発達障害」と呼びます。広義では、「アレクサンダ症候群（どもの）」もここに含まれます。幼少期で何を行う場合もありますが、基本的には幼少期に問題なれば発達障害あります。ただし、学習は問題な場合はあります。

発達障害は広範囲な概念を表す言葉であり、「コミュニケーション」に難がある（広汎性発達障害）、「広汎性発達障害の中での

【昨年度発行の「特別支援だより】



3 おわりに

通常学級の保護者から「発達障害について初めて知った」という声をいただいたり、同僚から「知的学級と自閉・情緒学級の運用の違いがわかった」と言われたりすると、特別支援だよりを発行していることが少しは役に立っているのかと思い、うれしくなる。1枚の文書で何かが大きく変わるとは思えないが、正しい知識を身に付けた人が他の誰かに伝えていくことで、少しずつ世の中が変わればいいと思いつつ、今年も特別支援だよりの1号を発行したところである。

伝えたいことは山ほどあるが、年に数回、各々 A4用紙1枚程度では限界がある。自分なりに考え、「発達障害について（主に保護者向け）」「特別支援学級の区分について（主に教員向け）」という2つの話題に絞ることとした。

学校として文書を出す以上、適当なことを書くわけにはいかない。執筆にあたっては、政府広報や文部科学省の資料（図表は主に「政府広報オンライン」から）、医療関係者による資料、特別支援の免許を取った際のテキスト等を読み込んだ。また、世の中でどんな誤解や偏見が多いのかを知るために、インターネットの掲示板等もかなり目を通した。

1号作成するために1か月以上かけており、自分自身もかなり研修を深めることができた。実際には紙面のスペースの関係で、2つの話題に絞っても伝えたいことの半分も伝えられない状況ではあるが、これが正しい知識を得るためにの入口になってくれれば、との思いで発行している。



一人一人の子供を主語にする 授業づくり

登別市立鶯別小学校 教諭 柴 田 航 輔

1 はじめに

本校は、全校児童185名（R7年7月現在）、教職員数29名で活動を行っています。児童アンケートから見える本校の特徴として、「主体的に学習することができている」「授業はわかりやすい」と思っている児童が多いことが挙げられます。一方で、CRTの結果を見ると「思考力・判断力・表現力」を問う問題を苦手としている傾向が見られます。つまり、児童は「授業が楽しいが、思考力を問われる問題でのつまづきがある」と考えられます。そこで、本校では、児童の「思考力・判断力・表現力」を高めるために、校内研修や授業改善を行っています。

2 一人一人の子供を主語にする授業づくり

(1) 目指す子供の姿の明確化とICTの活用

本校では、令和6年度の研修主題を「児童が主役になって活躍する授業づくり」として、校内研修を行ってきました。

初めに、同じゴールを目指すために「目指す子供の姿と目指す授業」を教員間で共有しました。その上で低学年ブロック、高学年ブロック、特別支援ブロックの3つに分かれ、ブロックごとに目標を設定しました。例えば高学年では、ブロックの目指す子供の姿を「自分の考えをわかりやすく伝え合う子」と設定し、6年生の体育科の学習では以下のようにより具体化させた上で授業を構築しました。

目指す子供の姿：「ペアの友達と課題発見・解決に繋がる話し合いをしたり、自らの課題解決に向けた努力をしたりする子。進歩状況に合わせて進んで挑戦する子。」

目指す授業：「児童自らが課題をもち、課題に向けて、目的意識をもって主体的に取り組む授業」

さらに、児童がより主体的に活動することができる手立てとして、Googleスプレッドシートや学習カードを活用しました（図1は「マット運動」のスプレッドシート）。お互いの進行状況を学年全体で、一目でわかるようにした結果、児童が練習方法や挑戦する技を自分自身で選択することができるようになりました。また、児童同士でお互いの技を見合う場面が増えると同時に、体育として必要な運動量を確保することができるようになりました。

図1：6年生「マット運動」のスプレッドシート

(2) 児童自ら目標や目的意識をもち、学ぶ授業を目指して

令和7年度では、「思考力・判断力・表現力」の育成を目指し、授業の中での振り返りに力を入れています。振り返りでは、児童が学んだことを通して、「わかったこと」「わからなかったこと」「次への目標」を書くことで学習活動に見通しをもち、児童の自己調整力の向上をねらいとしています。昨年度までもノートやICTを活用した振り返りを行ってきましたが、今年度からは3年生から6年生までがGoogleフォームを活用して、振り返りの観点などを統一し、同じ形式で取り組んでいます。このことにより、進級にても同じ学びのスタイルを継続することが可能となります。また、児童一人一人のスプレッドシートとGoogleフォームを連携させて、児童が今までの振り返りを見ることが可能となり、児童自らより主体的に学習できるよう工夫をしています。

タイムスタンプ	氏名	教科	単元	今日の学びを理解した、今日の課題を身に付けることができた。	自らの考えや意見を表現することができた。(発表や教えていたいなど)	授業の課題に対して、ねばり強く取り組むことができた。	記述
2025/07/17 10:00:12	算数	円の面積	2	3	3	3	だけごろの面積を覚えて頑張りました。
2025/07/17 10:00:23	算数	円の面積	2	3	3	3	今回の計算で円の面積は半径1辺の面積の約3.14倍だとわかった。
2025/07/17 10:00:24	算数	②円の面積 2時間目		3	3	3	今日の学習を通じて円の求め方を知りました。ただどのものもめきたまはずしかった。
2025/07/17 10:00:58	算数	円の面積	2	2	3	2	今日の勉強で、「円の面積は、半径を一直線とする正方形の面積の約3.14倍になる。」
2025/07/17 10:00:59	算数	円の面積	2	3	2	2	正十六角形をまるごとの面積を求めるのが、少し難しかった
2025/07/17 10:01:06	算数	円の面積		3	3	3	今日の学習を通じて円の丸い面積を調べるときは、1cm 方鏡が何面積になるかを調べたり、円の中に正十六角形を書いて面積を求める方法その面積を求めることができるということがわかった。
2025/07/17 10:01:09	算数	円の面積	2	3	2	3	今日の学習を通じてしっかりと覚習した。
2025/07/18 9:05:24	算数	③円の面積 3時間目		3	2	3	今日の学習で、円の面積を求める方法がわかった。
2025/07/18 9:05:45	算数	円の面積		3	3	3	今日の勉強で、円の面積=半径×半径×円周率の公式が分かって。
2025/07/18 9:06:58	算数	円の面積	3	3	3	3	今日の学習を通じて円の面積を求める公式が分かって早速家庭でやってみようと思った。
2025/07/18 9:07:22	算数	円の面積	3	3	2	3	今日の学習を通じて円の面積を求める公式が半径×半径×円周率で計算できる。
2025/07/18 9:07:29	算数	円の面積	2	3	3	3	円の面積を同じ数をかけて円周率をかける方法を覚えたら簡単になった。
							円の面積の公式が、半径×半径×円周率ということがわかった。

図2：振り返りのスプレッドシート

3 おわりに

以上のように本校の研修では、児童が主役になって活躍する授業の実現を目指し、様々な取組を行ってきました。このことによる成果として、子どもたちの振り返りから、「できた実感」や「次への目標」が読み取れるようになってきたことが挙げられます。一方、「わからなかった」ことがあった際、児童自らあるいは協働的活動の中から具体的な箇所・要因を見つけ、課題解決につなげることのできる「自立した学習者」としての力を育成することが、本校の課題として挙げられます。

今後も、「児童が主役となって活躍する授業」を実現し、子どもたちが自ら学び続ける力を育むことができるよう、実践的で具体的な場面の見える研修を継続していきます。



子どもを主語にした 理科学習の実践

伊達市立伊達西小学校 教諭 鈴木 大地

1 はじめに

「子どもを主語にする学び」とは、単なる指導法の工夫を超え、学習構造そのものを子どもを中心に再構成する実践である。筆者は、理科授業において子どもが自ら問いを立て、仮説をもち、検証しながら学びを深めていく姿を目指している。本報告では、小学校第5学年「電磁石」の单元における実践をもとに、子どもを主語とした学びの構築とその成果・課題について考察する。

2 授業設計と実践の概要

本実践では、児童の学習活動を記録したワークシートや発表資料をもとに、学びのプロセスを可視化した（図1、図2）。特に、ICTを活用した問い合わせの共有や自由形式での成果発表は、子どもを主語とした学びの姿を具体的に示すものであった。

单元名：電磁石の性質と活用

本单元の目標は、電磁石の性質や構造的要因と磁力の関係性に関する理解を深めることである。以下に、本実践の流れと主な工夫点を示す。

– 【導入】電池・釘・導線を用いた簡易電磁石を実際に子どもたちが作成し、クリップを吸い寄せる活動を通して、「電気で磁石ができる」現象を直感的に捉えさせた。これにより、児童の自然な驚きと疑問が引き出された。

– 【問い合わせの共有】児童が立てた問い合わせをICTツール（スクールタクト）上で共有し、「問い合わせのマップ」として全体で可視化した。これにより、他者の問い合わせに触れることで自身の関心が深まり、学びの方向性を明確にできた（図1）。

– 【探究の計画と実行】関心のある問い合わせを選んだ後、児童は4時間の探究時間を見通して学習計画を立案。実験に限らず、インターネットや書籍などで調べる手段も認め、自ら選んだ方法で仮説検証に取り組んだ。

電流が生み出す力

電磁石をつくってみよう

電磁石をつくって、使ってみよう。
使う中で気づいたことや気になったこと、調べたいこと、考えたいことなどを記録しておこう。
(注意事項：電磁石は使うときだけ電流を流す。)

- 使う中で気づいたこと
- ・電磁石を作ることができたけどクリップの数は一個、または二個が限界だった。手を使えば三個につくことができた
- 調べたいこと
- ・どうしたらもっと多くのクリップをつけることができるのか
 - ・鉄のほうにまくエナメル線の数を増やしたらどうなるのか
 - ・電磁石を使って豆電球のあかりをつけることはできるのか
 - ・なぜ鉄のほうとエナメル線と電池だけで電磁石を作ることができるのか
 - ・電池を直列つなぎ、または並列つなぎにすると電磁石はどうなるのか

図1 児童が立てた問い合わせをスクールタクト上で共有した問い合わせのマップの一例

- 【成果の発表と共有】成果は自由な形式（口頭発表・ワークシート・スライド・ポスター等）で表現させた（図2）。

3 子どもの学びと教師の支援

導入から生まれた児童の問いは、「なぜ電気で磁石ができるのか」「巻き数が多いと磁力はどうなるのか」「電流の強さで磁力は変わらるのか」など、単元の本質に迫るもののが多数見られた。

一方で、学習の枠組みから逸脱した問い合わせも生じたが、指導者は「その問い合わせを深めるために何が必要か」と問い合わせ返すことで、児童が自ら学びの軌道修正を行えるよう支援した。知識の定着が必要な場面では、教師が児童の問い合わせをもとに、必要最低限の内容を抽出し、検証実験や追実験を通して補完した。

4 評価の観点と課題

本実践では、以下の観点から児童の主体的活動を評価した。

- 問いの選択（学びの出発点） - 学習計画の立案（見通しと調整）
 - 解決手段の選択（方法の適切さと柔軟性） - 学びの言語化（振り返りと他者への共有）

これにより、学習内容の正確さだけでなく、「どのように学んだか」を評価の対象とした。

実践を通して、児童の内発的動機づけや思考の深まりは多く見られたが、一方で「問い合わせを立てること自体が目的化する」傾向や、学力テストとの接続に課題も残った。今後は、探究と評価、自由と系統性のバランスを見直しながら改善を図る必要がある。

5 おわりに

本実践は、制約の多い教育現場においても、子どもを主語とした学びの可能性を示すものであった。子どもが問い合わせを持ち、自ら学びを展開し、その学びを自覚できるようになることが、真に意味ある学びへとつながる。今後は、問い合わせの質を育てるための支援のあり方や、探究的な学びと評価を接続する方法の検討を通して、より豊かな授業づくりを模索していきたい。

	学習予定	成果	疑問	感想
1	Googleで調べる (電磁石の活用など)	電磁石は、磁力が強いので、金属類を運搬するクレーンでも使われることがあるらしいです。 【 www.google.com/search?q=%E9%AA%98%E7%89%A9 】	大きな電磁石をどうやって作っているのか気がなりました。	大きな電磁石などを運搬できるほどの磁力があることがすごいと思いました。
2	キッド組み立て (できれば実験開始)	キッドをうまく組み立てられました。	どのようにして使うのが気がになりました。	組み立てると時間はなくなりたので次の時間に組み立てたいです。
3	「電磁石の磁力を最大にする方法」の実験	実験は失敗しましたが、リストの時間に2つの実験をします。【失敗??】	なぜ失敗したのかを考えます。	次こそは実験を成功させたいです。
4		エナメル線の巻数 200巻き：クリップ付 100巻き：クリップ付 になりました。	なぜ、巻き数でくっつくる直が増えるのかが疑問です。 【失敗】	今回は成功したので、次回のリストの実験も成功させたいです。

実験をやって

やった実験の内容は、エナメル線の巻数で、くっつく釘の量（磁力）は変わるのが実験をしました。予想は、あまり変わらないだろうと思っていましたが、実際の結果は、エナメル線200巻は、釘4個。エナメル線100巻は、釘1個になりました。この実験の結果からわかったことは、エナメル線の巻数によって、くっつく釘の数（磁力）は変わることがわかりました。巻数が200だと巻き数が100の物よりも約2倍ほど磁力が変わることがわかりました。実験の他にもGoogleで調べて、電磁石を活用しているところなどのことを調べて、クレーンで金属類などを運搬するときにも大きな電磁石で運んでいることがわかりました。その電磁石で運べる重さは、最大32トン（クジラの重さほど）までも運搬することができます。

図2 児童の探究計画と結果、ふり返りを含む学習記録の一例



児童が主体的に学習できる 授業を目指して

厚真町立厚真中央小学校 教諭

高田美緒
佐藤寛太

1 はじめに

本校は、厚真町の中心部に位置する「強く・正しく・明るく優しい心を持つ子ども」の育成を目指す全校児童151人の学校です。田植えやハスカップ狩り、サーフィンなど、地域に根ざした特色ある体験学習を展開したふるさと教育を進めています。また、児童の学力向上・教師の授業力向上に向けて、町教育研究所や本校研修部を中心に様々な取組を行っています。本稿では、自校の学力向上に向けた取組の一部を紹介します。

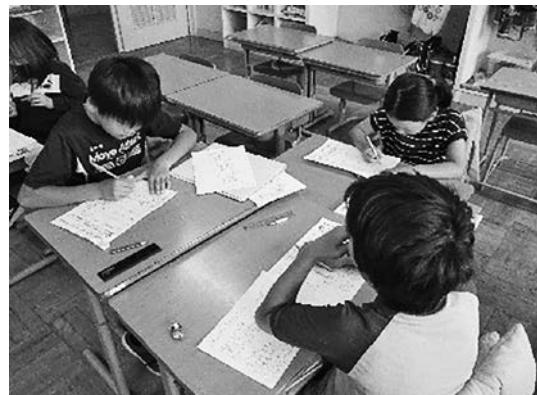
2 一人一人を主語にする授業の実践例

(1) 国語科の自由進度学習（3年）

「仕事のくふう、見つけたよ」では、興味のある仕事の工夫を調べ、報告文にまとめる学習をしました。全体で確認することは、単元の学習計画やねらいのみ、その後は児童が各自のペースで学習を進める自由進度学習を取り入れました。どんな題材にするのか、何を使って調べるのか、どのように学習するのかなどを自分で選び学習を進めました。社会科のスーパー・マーケット見学の学びと関連づけて書く児童もいました。毎時間、振り返りシートに学習内容と取り組み方の自己評価をし、それをもとに次時の課題を自ら設定するようにしました。

この学習方法を取り入れて良かった点は、児童が生き生きと学習を進めていたことでした。「学習させられてい

る」のではなく「自ら進んで」「課題解決のためにどうすればよいか」を考える子が多く見られました。確実に押さえたい学習内容は途中で一斉指導を取り入れたり、困っている児童に手厚く支援したりすることで学習計画に遅れが出ないように配慮しました。しかし、個人差は大きく、特に自分の力で進めることに課題のある児童への支援に関しては様々な課題が残りました。学習の主体は児童であっても、教師が個々の児童の実態を把握し、どう伴走するかのビジョンを持ち進めることが重要であり、今後もさらに改善の必要があると感じました。



(2) 教科ごとのICTの活用（3年・5年）

国語科「すがたをかえる大豆」では、加工の仕方によって食材がどのように姿を変えるかを調べ、新聞にまとめました。本や教科書以外にタブレット端末を「調べる」手段の選択肢の一つとしました。本には無いツールを取り入れたことで、多様なまとめ方や発表が見られました。

社会科では、授業で疑問に思ったことから自分の問い合わせを作り、タブレット端末に「まとめる」ためにスライドやCanvaなどのソフトを使いました。これらのソフトは操作がしやすく、タブレット端末の操作に苦手意識を持っていた児童も、夢中になって作品を仕上げようとしていました。また、社会科に苦手意識を持っていた児童も、自分で気になったことを調べている姿は、とても前向きで楽しそうに見えました。

算数科では「振り返り」の活動にタブレット端末を使いました。スプレッドシート内に全時間の学習内容を貼り付け、児童はそこで確認しながらそれぞれのペースで学習を進めていました。教科書の問題、スキルの問題が終わったら、その間に分かったこと、分からなかった問題を振り返りとして書かせました。一日で自分の課題が分かり、テスト前に苦手としていた内容を振り返ることができました。

このように、授業では教科の特性に合わせてICT機器のソフトを使い分け、使う目的を児童に明確にすることを心掛けています。教師側の指導と準備は必要になりますが、ICT機器は「一人一人を主語にする授業」を行う際の有効な手立てとして手応えを感じています。

課題	取り組むこと	つまずいた問題、終わらなかった問題	ふりかえり(YW)
23×34の筆算のしかたを考えよう。	・ノートに日づけ、ページを書く。・教科書p 8 6 □穴埋め、△2・もっと練習p 1 2 2△3 9～△4 0・スキルp 4 4	もっと練習の△40につまずいた。	23×34の筆算の仕方を考えました。くりあがりがあって足しのを忘れそうになっただけで、できてよかったです。次は足しのを忘れないようにしっかりやりたいです。
練習を一生懸命しよう。	・ノートに日づけ、ページを書く。・教科書p 8 8 △1～△4をノートに書く。・スキル4 6～4 7	スキル46の⑤につまずいた。△2の説明が少し苦手。	練習を一生懸命頑張れました。説明のところが苦手だと気がつけました。もっとすればやくできるようにしたいです。

3 おわりに

本校では、教師間で授業を見合う交流週間を各学期で設定しており、互いに授業を評価し、授業力を高め合っています。そこで印象的だったのは、自由進度学習やICTを活用した学習を積極的に行っている先生方の姿でした。「ICTが苦手だ…」と言いつつも子どもと一緒にタブレットの使い方を学ぶ先生、一斉授業の効率の良さに頼らず、単元計画を全て児童に考えさせている先生と、様々でした。児童主体の学習を行うためには、このように教師自身が新しいことを受け入れ、トライしていくことが必要だと感じました。今後も児童が主体的に学習できる授業の構築を目指し、町内、校内の先生方と日々研鑽し合い、高め合っていきたいと思います。



一人一人の子供を主語にする 授業づくり

豊浦町立豊浦小学校 教諭 長田 真希子

1 はじめに

本校は、児童数85名、学級数8の小規模校で、山と海に囲まれた自然豊かな環境の下、地域とともにある学校づくりを行っています。令和6年度から、ふるさと学習の充実に向けて、総合的な学習の時間の見直しを図ってきました。これによって、ふるさとへの誇りと愛情をもち、自分の夢や希望の実現に向けて、主体的・協働的に学び続けることができる子を育成することができ、そのために一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指してきました。今回は、4年生の総合的な学習の時間の授業実践について述べたいと思います。

2 実践内容

4年生の学習のテーマは、「安心・安全な豊浦町」です。当初、有珠山における減災教育のみの内容で考えていました。しかし、初めの授業で子供に安心・安全のイメージについて聞いてみると、交通安全について考えている子供が非常に多いことが分かりました。そのため、子供の興味関心に寄り添い、身近な交通安全をテーマにした学習からスタートし、その後、地域を広げて有珠山噴火の減災教育に取り組むという二本立てに変更しました。

(1) 地域の交通安全

普段何気なく歩いていた学校の周りを課題意識をもって注意深く歩いてみると、子供たちは短時間でたくさんの危険箇所を見付けることができました。また、自分たちの安全を守るために工夫にも注目することができました。これによって、「もっと豊浦町内の安全や危険な場所を調べていろいろな人に教えてい。」「交通安全教室でお世話になっている役場の方や、登下校を見守っている交通安全指導員さんから話を聞きた。」などの声が子供たちから挙がりました。



専用タブレットで情報整理する児童

たくさんの人間に調べたことを伝えるために、今回は外部から借用した専用タブレッ

トでデジタルマップを作成することにしました。フィールド調査では、町内の交通安全を守っている警察官や消防士、駅売店員などに聞き取りをし、役場職員と一緒に町を歩いて情報収集しました。その後、自分たちのマップに必要な項目は何かを分析・整理してマップを完成させ、役場職員に要望・提言しました。マップは豊浦町役場のホームページや広報誌に掲載されました。

(2) 地域の減災教育

本校は、20年から30年周期で噴火するといわれている有珠山のある西胆振地域に位置し、地域と連携しながら教育活動に取り組んでいく必要性が高まっています。しかし、学習の初めに子供にアンケートを取ると、有珠山噴火や噴火が起こった時の身の守り方などについてほとんど分からぬという結果でした。近い将来噴火が起こる可能性を知った子供たちは、この現実を真剣に受け止め、これから何を学んでいく必要があるかを考えて課題設定をしました。

町内の火山マイスターや三松正夫記念館館長、役場職員などの協力の下、実際に目で見たり、肌で感じたりした体験活動をすることで、子供の知的好奇心を刺激し、自ら学びを深めていく意欲や主体性に繋がりました。

噴火被害施設の見学や体験談の講話、昭和新山登山ではあえて危険体験をすることで生きた火山を感じ、自分の身の守り方を知ることを体感しました。初めのうちは、噴火を恐がっていた子供が、正しい知識や火山の恩恵、減災教育を推進する人々などと出会うことで、有珠山が地域にとって大切な存在へと変わり、学習したことを広く伝えていきたいと考えるようになっていきました。そこで、昭和新山の麓で観光客にガイドをしたり、道外の4年生とオンライン交流したりして、学んだ成果を発信する機会をもちました。

3 おわりに

「一人一人の子供を主語にする」ために大事なことは、二つあると考えています。

一つ目は、子供の興味・関心を的確に捉えることです。教師側から学習課題を一方的に提示するのではなく、課題解決のために、「行ってみたい」「やってみたい」という気持ちが、課題解決の必要性や課題追究の意欲に繋がると考えています。

二つ目は、子供たちの学習の場を広げることです。子供同士の協働、地域や保護者との対話、端末活用などで多様な他者と関わり、学習活動を地域の中で行ったり、成果を公開したりすることで、子供の学習意欲が高まるだけでなく、地域への貢献意識や自己有用感の高まりにも結び付くと考えます。

「一人一人の子供を主語にする」ために、これからも子供の主体性を伸ばし、互いに学び合い、高め合えるような授業を目指していきます。



観光客にガイドする児童



その子のための オーダーメイド教育

白老町立白老小学校 教諭 渡辺 彰子

私のターニングポイントとなった子。それは、育児休暇明けに担任した2年生のAくんだ。初めて会ったAくんは、イヤーマフをして、お母さんにぴったりくっついていた。3語文ほどの会話やおうむ返しをする。担任が変わったことに不安を感じ、玄関で「帰る。Aくん、おうちに帰るよ。」と大の字になって泣いていた。最初はパニックで私を叩くこともあり、正直なところ、かなり動搖した。当時の私は、「知的学級とはいえ、学習で大きく遅れを取ってはいけない。」と思う部分があった。今考えると、恥ずかしい話だ。きっと負荷が大きかったのだろう。本人をきちんと見てはいなかったということだ。4月はパニックを起こすことが多かった。きっとAくんにとって、私は「よく知らない人」であり、「できないことをさせようとする人」だったに違いない。

Aくんのお母さんは毎日の登下校を歩いて送迎していた。いつも温かい笑顔でAくんを「大丈夫よ。」と送り出してくれるお母さんに、「早く関係を築いて、不安なく登校できるようにしたい。」と私も思った。その年の私の目標は、「Aくんが楽しく学校で過ごせること」「できることを増やすこと」だった。今まで私が通常学級でやってきた、たし算・ひき算の教え方では、Aくんにとってハードルが高い。他の先生に相談し、いろいろな本を読んだ。その中で一番理解しやすいのが、ブロック操作だった。集中力は高いため、3週間ほどブロック操作を繰り返しているうちに、繰り上がりのたし算はできるようになった。

機械的に操作していて、たし算本来の意味はわかっていないかもしれない。それでも私は、計算ができるようになったことに感動を覚えた。「Aくんのための学習指導。それってオーダーメイドってことでしょ？教育の原点は、まさにこれなのでは？」そ



う思った私は、Aくんのためにもっと自分が勉強しなくてはと考えた。まず、特別支援教育の知識が乏しすぎる。私は夏休み中に特別支援教育の講習を受けることに決めた。

講習で衝撃を受けたのは、「快・不快の感じ方の大きな違い」「見えている世界の違い」の話だった。「この子はどう感じている?」というところから考えなくてはいけないのだ。通常学級の多くの子には使える指導法でも、一部の子にとっては適していないことがある。講習を受けながら「あの子の場合だったら、どういう手立てを取る?」と考えながら聞くことができた。手探りだった指導も、「これならできるかな。」と、彼のための方法を考えることが楽しく、面白くなっていった。Aくんはパターンが分かれば、真似をしていくうちにできるようになる。パニックを起こすことではなくなっていった。鍵盤ハーモニカは指遣いを覚えて『こぎつね』を5本指で演奏できるようになった。はじめのうちは20までの数もおぼつかなかったが、3学期には、ブロックを使って2桁のたし算の筆算もできるようになった。

Aくんは、動物が大好きで、動物の絵本や図鑑を眺めていた。「今日は、動物の絵と食べ物についてワークシートに描くよ。」何度もおうむ返しをした後、カバの絵を描き始めた。カバの大きさと食べるものについて指示した箇所に描き、いろいろな動物について描いていった。こうして『Aくんのどうぶつづかん』ができた。2学期のお楽しみ会では、交流学級で「どうぶつクイズ」を画用紙に描いて、私と一緒に出題できたり、3学期の参観日には、それまで作った『どうぶつづかん』をお母さんに見せることができた。

Aくんとの日々は、突然終わりを迎えた。令和元年度、コロナ禍による休校だ。
「明日から学校に来られなくなりました。」

私が話したときのAくんの茫然とした表情。少しの間の後、Aくんは
「さびしいね。」

と、一言だけ呟いた。普段は自分の感情をあまり言葉にすることがなかったのに。

私は異動が決まっていた。修了式で学校に来たAくんとお母さんにお別れの挨拶ができた。お母さんは感謝の言葉を述べてくださったが、お礼を言うのは私の方だ。Aくんとお母さんのおかげで、特別支援教育の知識だけではなく、その子に合った指導方法や子どもの見取りの大切さについて学ぶことができた。

コロナによる行事の縮小が続き、前任校へ行くことはなくなったが、ある日、街の商業施設でAくんとお母さんに偶然会えた。無言だけど私を見てニヤッとするAくん。覚えていてくれて嬉しかった。あれから数年経つ。Aくんのこれから的人生も幸せなものでありますように。



※生成AIで画像を作成

編集後記

現代社会において、ICTの活用が進み、子供たちに主体的・対話的で深い学びを保障する実践が求められています。本特集では、このような時代の流れを捉え、「一人一人の子供を主語にする授業」を第一のテーマいたしました。

また、本研究所の「今、この時代だからこそ『人が人と生きていくことの原点』を考えたい」という強い思いから、「学年・学級経営」をもう一つの特集テーマとして設定いたしました。日々の教育現場で奮闘される先生方の貴重な実践例を数多くご紹介しております。

さらに、不登校や長期欠席の児童生徒のために学校全体で安心できる居場所を作る取組や、特別支援教育における教員の専門知識をアップデートすることの重要性など、多様化する教育現場のニーズに応える実践も寄せていただきました。

時代を超えて変わらない大切な価値観と、今この時代だからこそ必要な価値観に基づいた様々な実践が、読者の皆様の今後の教育活動の一助となり、子供たちの豊かな未来を創るきっかけとなれば、本教育研究所としても大変嬉しい限りです。

最後になりましたが、お忙しい中、執筆にご協力いただきました皆様に、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

胆振教育研究所 所員 福山元気

機関誌「教育いぶり」第98号

発行年月日 令和7年10月14日
発 行 胆振教育研究所
代 表 者 所長 佐藤 淳
印 刷 (株)日光印刷